**大阪市立大学【文学部・文学研究科】**

**日　時**　平成２４年７月１７日（火）　１６：００～１７：３０

**場　所**　全学共通教育棟２階　会議室

**出席者**　＜新大学構想会議＞

矢田委員（座長）、上山委員、大嶽委員、尾崎委員、野村委員、吉川委員

＜大阪市立大学＞

文学研究科　井上徹研究科長、池上知子教授、添田晴雄准教授

■大阪市立大学から資料に基づき概要を説明

（大阪市立大学）

お手もとの「大阪市立大学文学研究科・文学部の現状分析」と、事務局作成資料に沿って説明いたします。

文学研究科は、平成20年3月に学術憲章を制定しております。かなり長文ですので要約しますと、「人文科学、行動科学の方法や考え方を通して人間が生み出した文化的事象と社会的事象を、そしてそこに内在する普遍性を探求すること。」また「今日的課題の解決に貢献しうる人文科学、行動科学の構築、及び先端的研究成果をグローバルな視野から情報発信できる国際的競争力を備えた最高水準の教育研究を達成すること。」といったあたりに要約されるかと思います。この理念を基本といたしまして、深い思考力を身につけ、社会の要請に応え、国際社会で活躍できる人材、さらに大学院重点化を行った部局として、日本のみならず、海外でも通用しうる高度な研究能力を備えた人材を育成することが、文学研究科の基本的使命と言えます。

アドミッションポリシーもこれに対応するものとして制定しております。この目標を達成するために、これまでに既存の学問の垣根を越えて、都市を複合的にとらえる試み、学際的国際的な分野の教育改革を行ってまいりましたが、とりわけ都市を焦点とした学際的な教育研究を進める中で大きな成果を上げてきたと考えております。

資料に、それぞれの学科、大学院に関するデータがございます。充足率に関わるものですが、まず大学院の充足率ですが、平成24年度入試で前期後期ともに、7割前後です。第一期中期計画期間中における目安はほぼ7割ですので、おおむね目標を達成していると考えております。ただし、充足率100％を達成しようとした場合には、定員の削減等のこれから考えなければならない課題がございます。

入試関連ですが、学部入試について申しますと、この数年上下の幅はございますが、志願倍率はおおむね4倍前後です。近隣の私立大学の志願倍率が3倍前後ですので、これをおおむね上回っています。また、辞退者数も毎年5名以下にとどまっていますので、受験生の間で一定の人気を保っているのではないかと分析しております。

3番目の項目で学生関連のデータですが、毎年の退学者数が全学生中に占める比率が1.28％から0.29％までの間でして、ほとんどの学生はきちんと卒業しています。本学部は

教室を単位として少人数教育によるきめ細かな学生指導を行っておりますので、その成果が出ていると思います。ちなみに、4ページに「大阪市大文学部に入学してよかった」という見出しで、1年生を対象としたアンケートですが、大体8割程度と、かなり満足度が高くなっております。

就職関連ですが、文学部の就職決定率は、おおむね80％前後でございます。就職先は、銀行・金融、教員、公務員、教育産業、情報サービス、保険関係です。公務員・教員などを目指して就職浪人を選択する学生が多いため、このような数値になっておりますが、卒業後2～3年の範囲でみれば、ほとんどの学生が常勤の職を得ています。また、文学研究科、大学院の就職決定率は、平成20年度から22年度の期間におよそ50～60％弱の間にあります。こういう数字を見ますと、就職率が低いということになりますが、理由のひとつは、大学の就職担当が、就職状況をきちんと精査し始めたのが平成23年度からでして、それ以前の統計が不十分であることがあります。学部と同様に、就職しても大学に届けていなかったり、公務員・教員志望者で浪人しているものが少なくありません。また、後期博士課程の単位修得退職者は、研究職を志望することになりますが、博士号を取得し、大学等の高等教育機関で就職するまでの間、数年間は非常勤講師を務めたり、他のアルバイトをすることが多いですので、どうしても単位修得退学時点での就職率が低くならざるを得ない事情がございます。ちなみに、ここにはございませんが、平成23年度について、事務が集計した数値を追加しますと、前期博士課程終了時が73.3％、教育、公務員、企業に就職しております。後期博士課程の単位修得退学者につきましては、調査票を提出したものはすべて就職が決まっております。他大学、あるいは専門学校に就職しておりますが、その数が多いわけではありません。今後も調査をきちんとするということが課題であると思います。

教員関連、財務関連などのデータについてですが、財務のうち、7番目の外部資金関連との関係が重要となりますので、一言申し上げますと、文学研究科の外部資金は、科研費とそのほかの補助金が大半を占めております。とりわけ科研費の割合が63％でして、全学の獲得件数の9％を占めております。科研費は、全国的、あるいは社会的レベルの研究が採択されていますので、文学研究科の各専門の研究水準が高いことの表れであると受け止めております。

他大学との比較ですが、市大文学部の偏差値はおおむね府大、関大、関学とほぼ同じでして、大阪大、神戸大と比べますと、やや下回っておりますので、改善の余地があろうかと思います。また、教員一人当たりの学生数で見ますと、市大文学部は、府大、大阪大、神戸大、などと同程度でして、少人数教育が特色になっていることが分かります。市大文学部の特徴は、成績の良好な学生を受け入れて、少人数教育の方針で、優秀な学生に育て上げ、社会に送り出すことにありますが、この方法をさらに推し進めて、近隣の大学、大阪大、神戸大に勝る質の高い学生を受け入れること、そして、本文学部がこれまで学際的国際的教育に力を入れてきておりますので、そういった特色ある教育を通じて、社会に送り出していくことが求められていると考えております。

資料7ページ、他大学と比較した分野的特徴です。学部では3学科、哲学歴史、人間行動、言語文化のもとに13のコースが属しております。3学科13コース編成です。人文科学、行動科学の主要な領域をほぼカバーした構成ですが、他大学には分野を細分化し、特殊性の高い領域を設けているところもございますが、本学では各分野にミニマムエッセンスを厳選し、コンパクトな分野構成となっていることが特徴です。参考資料といたしまして、10ページで細かくなっておりますが、別表の2-2aとして、学部分野構成の比較として、近隣所大学との比較がございます。

それから、他大学にないユニークなコースとしては、言語応用と、表現文化があげられるかと思います。いずれも特定の言語圏文化圏にとらわれず、文化現象を総合的に考察する新しい学問的潮流に沿っている点に特色がございまして、学際的な教育をめざしております。実際、改革の箇所でも述べますが、文学部の改革を行う上で設けたコースですが、学生の人気が高く、標準定員の2倍前後となっております。

大学院では４専攻、哲学歴史学、人間行動学、言語文化学、アジア都市文化学のもとに15専修が属しております。このうち、アジア都市文化学は各部を持ちません。大学院のみの専攻で、他の3専攻については、ほぼ学部の学科コースに対応しております。学部を持たないアジア都市文化学につきましては、東アジア東南アジア10都市に関して、多様な視座からアプローチする学際的先端的特徴を持つ専攻です。学部と独立しておりますので、外部出身者が大半を占めておりまして、留学生や社会人院生が多く在籍しております。情報交流型の教育研究環境を実現しているところでございます。

他大学と比較した場合の文学研究科の全体的特色としましては、人文科学、行動科学の各分野の基礎学教育をベースとしつつ共通テーマとして、都市を掲げ、全学科全専攻が一体となって教育研究を推進しているところにございます。都市を焦点として一体的な教育研究システムを支えておりますのは、これまで10年以上にわたって研究科内で組織してきました各種組織でありまして、都市文化研究センター、インターナショナルスクール、上方文化講座、教育促進支援機構がその主だったところでございます。これにつきましては、11ページ別表2-3特色ある取組の比較をご覧いただくと、一覧にして近隣大学と比較しております。

これらの組織の詳細につきましては、各部局の特徴的な取り組みを紹介させていただく際にご説明いたします。

主な産学官の取組、成果でございます。この点につきましては、高大連携等の事業と、自治体、企業など、地域の諸団体との地域連携事業とがございます。

高大連携事業につきましては、文学部を知りたい人のための市大授業、文学部の教員による各種講演会、私立の幼稚園から小中高の学校支援ボランティア活動、教員免許の更新講習などがございます。地域連携事業としましては、萬年社のコレクションをデジタル化し研究する萬年社写真コレクションのプロジェクト、近鉄あべの文化サロン共催、市の博物館協会との包括連携協定による連携事業、また、和泉市との包括連携協定に基づく事業、

各種の公的団体が主催する講座講演会との協力、住宅研究寄付金等の講座などがございます。

続きまして、これまでの改革の取組についてご説明します。平成13年4月、大学院重点化に伴いまして、文学研究科では、従来の12専攻を再編し、新たにアジア都市文化学専攻を加えた計4専攻16専修という新しい体制を発足させました。この重点化は大学院を中心とする教育研究組織として、文学研究科が大きな飛躍をなす契機となるものであります。ただ、大阪市の行財政改革が平成14年度以降始まりまして、新規の行財政計画が平成18年度から平成22年度まで執行されております。これにより、教員数が従来の97名体制から、平成19年度末の70名体制になっております。さらに、平成23年度からは69名体制となっております。平成13年度と比較して3割の削減となっておりまして、この削減が従来の教育研究体制にも大きな影響を与えております。まず、大学院で申しますと、平成22年4月、ドイツ語ドイツ文学専修とフランス語フランス文学専修を統合して、ドイツ語フランス語圏言語文化学専修としております。これは教員削減に伴う措置です。また、学部組織では、平成13年4月の大学院重点化スタート時には、3学科15コースを設置していましたが、その後、ドイツ関係とフランス関係及び哲学関係を統合して、3学科13コースに再編しております。学部の第二部では、一部と同様のカリキュラムを提供する方針に基づいて、3学科12コースを設置しておりましたけれども、行財政改革のもとで、カリキュラムが維持できなくなりまして、平成17年度からコースを廃止して、3学科を人文学科に統合しています。さらに平成22年4月以降に募集停止しております。

70名体制の下で、いかに教育研究活動を維持発展させるかということが、この10年間に課せられた課題です。この課題に対して、いくつかの側面から対応しておりますが、第1に、ＣＯＥプロジェクトの採択以来都市研究を核として外部資金を獲得してきましたので、その成果を教育、社会貢献に還元する方針を維持してまいりました。第2には、削減された教員ポストを有効に利用するために、研究科長裁量枠による重点配布の考え方を導入し、都市研究重点化のほかに、実験科目、学生数、教職などを重点項目としてまいりました。第3に、学部入試において、一般入試に加え、外国人特別選抜等、その他入試を導入しております。

それから、各部局の特徴的な取り組みや今後の展開、資料17ページですが、ここでは、文学研究科がこれまで進めてきた主な取り組みについて記載しております。文学研究科で大きなターニングポイントとなったのは、文部科学省の21世紀ＣＯＥプログラム「都市文化研究創造のための人文科学的研究」が採択されたことでありまして、この事業を進める中で、国内外の研究拠点を軸として、国際的な教育研究を推進するという形を作りました。その形態は現在に至るまで維持しております。その中で、先ほど触れましたが、都市文化研究センター、インターナショナルスクール、上方文化講座、教育促進支援機構が機能しております。

最後に、資料20ページ、今後の展開についてご説明します。文学研究科・文学部は人文

科学と行動科学の構築をうたいました学術憲章の精神を受け継ぎまして、都市文化研究を焦点とする新たな基礎科学の地平を切り開くことを目指しております。都市文化センターを軸として、人文科学、行動科学両者にまたがる学際的国際的な都市文化研究をすすめ、そこで得られた研究成果をもとに、外部資金の獲得、社会貢献への寄与、研究の国際化が円滑に進むようなシステムを整備し、またグローバル化に対応した国際的な教育体制を構築します。インターナショナルスクール、各種若手研究者の海外派遣事業などのさらなる展開、海外の拠点との連携による国際的教育ネットワークの確立などが課題となっております。そして、これまでの学際化国際化の事業は、大学院の重点化に伴いまして、当然のことではございますが、大学院を中心に展開してまいりました。次の段階としては、学士課程に展開していく必要がございます。具体的には、副専攻制の導入、英語授業を軸としてアジアの言語文化を見据えた多言語教育などを展開して、文学部学生の学際的国際的な能力の育成に努めたいと考えております。また、教育促進支援機構の事業、教育研究面における文理融合の模索、高大連携や大阪市内外の自治体との連携など地域貢献事業なども検討課題となってまいります。これらともに、文学部が実績のある分野ですので、確実に発展させることが可能です。とりわけ、教育促進支援機構を軸とした学びの場のさらなる充実は、文学部が力を入れているところで、学習モデルを開発し、全学、全国に発信していく役割を担っていきたいと考えております。

以上、簡単ではございますが文学研究科・文学部の現状と課題をご説明いたしました。

■質疑応答

（新大学構想会議）

都市文化研究センターの所属が分かりにくいのですが、大学院に附属しているんですか。ここに所属している教員はいますか。

（大阪市立大学）

都市文化研究センターに張り付いた教員はおりません。基礎組織としては、教員組織が基本ですので、学部、大学院、ほぼ一致しますが、学部・大学院を貫いた教員組織で、所属はそこになりますが、そこからとりわけ都市、及び都市文化について優れた実績を挙げている研究者が集まって、いろんなプロジェクトを遂行する、そのプロジェクトに大学院生とか、学生を参加させて、学生の研究、学問的水準の向上を図っていくことをやっております。

（新大学構想会議）

文学部の教員組織が、そこをある程度横に貫くというか、横断的な組織で、所属は皆さん別ということですか。

（大阪市立大学）
そうです。

（新大学構想会議）
都市文化学専攻というのは大学院にあるんですか。

（大阪市立大学）
大学院のアジア都市文化学専攻です。

（新大学構想会議）
それは学部には所属しないわけですか。教員は何名いますか。

（大阪市立大学）
そうです。5名おります。これは戦略的にこれからアジアが重要になるということで、とくにアジアの都市に焦点を当てた研究組織です。

（新大学構想会議）
伝統的に文学部はどこの横並びで、哲、史、文、社会心理、教育というのがあって、文は言語関係が入っていますが、そこに都市を無理して横ざししていますが、都市の研究者が多いという話は分かりますが、全員が都市というワードで研究のベクトルを変えることは無理だと思いますが、結果的にどうなっていますか。

（大阪市立大学）
文学部が飛躍するためには、並みのことをやっていては難しい。その場合に、ＣＯＥのプログラムが大きいですが、文学部創立50周年記念事業なども当時ありましたが、その時に、何か飛躍させようということで、ＣＯＥに応募したところ当たったということが非常に大きい、それを学部研究科の中心にしていこうということで、意見としては合意を見ました。しかし、全部乗っかるのは無理でして、最初はＣＯＥのスタート時は、欧米、アジアほぼ全専攻がかかわるような形でＣＯＥを推進していましたが、中間審査で指摘を受けた際にアジアに絞りました。それ以来、アジア及びアジアの都市を中心としたプロジェクトを学内で展開し、文部科学省が提供するプロジェクトと連携させることにしました。

（新大学構想会議）
元々伝統的で哲、史、文できちんとした学者がいますよね。その中で、地理とか社会学など都市が得意な学者がいて、都市を看板にしてもいい、という話はわかります。看板にしたとたんに、都市と関係ない人まで都市ということにベクトルを合わせるとなると、学

問的には、かなり無理があるのではないかと思います。

多様性があって初めて文学部だと思うのですが、とくに文学部の場合はダイバーシティーがポイントで勝手にいろんなことをやってレベルが上がっていくわけで、それを一つに強引に収斂するのはいかがなものか、という思いはありますが。

（大阪市立大学）

おっしゃることはわかりますが、ただ、私自身も初めから都市は関係ない。ただ、都市に関わることはやっている。都市に関わって10年以上になりますが、学会で都市を売り物にして、「私は都市学です。」と言っているわけではありません。ただ、10年の間に、いろんなプロジェクトに関わってきただけに、どうしても都市を焦点にしていろんな関係が出てくる、自分の研究の幅を広げることに役だったとは思います。従来の研究ももちろん続けているわけですけれども。そういう効果が一つと、やはりプロジェクト経費を獲得するということは、刺激を受けるという意味で大事ですので、それに学生も関わらせることで、院生もすべて都市のことをやれるわけではありませんが、海外に派遣させたり、専門を超えた研究会に参加したりすることで、かなり大きく触発されたと思います。ですから、ＣＯＥの期間にも30数名の博士課程取得者が出ていますが、いつまでに何かをしなければならないという必死さがいい効果を生んだと思います。

（大阪市立大学）

それだけではなくて、資料22ページにもございますが、都市というキーワードで取り組んでいるわけですが、一部の専攻にするのではなくて、ＣＯＥの業績もそうですし、大学院ＧＰもそうですし、若手研究者支援にもなりますが、特定の学科、専攻に偏っているのではなく、すべての専攻に活かしていこうという発想です。都市という研究は、おっしゃる通り、それほど係わりのない研究もありますが、それとかかわることで、文学研究科全体が発展してきたことはあります。

もうひとつは、若手を派遣する時、あるいは院生に海外で英語で発表させるときに、都市の専攻だけはだめで、文学研究科の英語の先生が関わって、大学院のすべての専攻を対象にして、プログラムを組んで送り出しています。一部の専攻の狭いところで実現できるようなものではなく、文学研究科の組織を上げて取り組むことがあるかとおもいます。

（新大学構想会議）

文部科学省の外部資金の、なんというか、財務省に対する説明方法でしょうか。

（大阪市立大学）

今の文部科学省の競争資金はもっと細かになっていますね。ですから、都市というような漠然としたものでは、たぶん取れないと思います。もっと特化したようなものでないと。

今、文部科学省では「頭脳循環を加速するプログラム」というのが一番新しいですけれども、これは教育と研究がセットで、それを世界的に循環させる、という計画ですが、これなどはかなり特化したテーマでないととれない。

（新大学構想会議）
もっと学問というものはベーシックではないかと思いますが。とくに文学部とか、理学部では。

（新大学構想会議）
教育支援促進機構というのは、文学部だけですか。他の学部もありますか。

（大阪市立大学）
文学部が発足させまして、全学でも考えておられるようですが、部局単位では文学部だけです。

（大阪市立大学）
これは、資料26ページにありますが、文学部の50周年記念で作ったものですが、教員がやるのではなくて、学生が自分たちのためになるようなことを企画して、教員と大学院生と学生とが一体となって、最初は新しいことをすると予算がないということで、我々がお金を出し合いましょうということでやりました。そんな中で、本日お配りしている文学部案内は、ここ5～6年は学生が作っております。学生に権限を委譲して、学生も嬉々として作っております。それからオープンキャンパスも5年前から、学生に企画運営させています。入試説明とか科長説明とかも、パワーポイントを作るとか、司会、流れを作るのは学生がやっています。科長のスピーチのだめだしも学生がやります。

（新大学構想会議）
全学的にやろうという流れにはならなかったんですか。

（大阪市立大学）
ゆくゆくはしたいと思っていますが、まずは、文学部でモデルを作って、それをたとえばオープンキャンパスでやっているようなことを、全学的に何年かしてみるとか。

（新大学構想会議）
学生のエネルギーを使うとものすごい効果がありますね。受験生の親も喜びます。自分の子供が1年後にこんなに育つのかということで、1石3鳥くらいの効果がありますね。

（大阪市立大学）
入学者が「先輩と話したから市大文学部に入りました」というようなこともあり、実感としてあります。やっている学生自身も、市大文学部に来てよかったと思うようになるようです。

（新大学構想会議）
全学でやってみてください。少なくとも文系で。

（新大学構想会議）
平成15年に始まっているのに、10年でまだ全学に広まらないというのが不思議ですが。

（新大学構想会議）
理系と医系は忙しいんですかね。

（大阪市立大学）
文学部を知りたい人のための市大授業というのは、理学部と共催しています。そういった形で、全学に広げていきたいと考えています。
それと、文系でも、文学部は共通教育を担当しているということもあって、文系学部の中では比較的規模が大きいんですね。経済とか法では、30名前後で、教員も余力がどうしても出てこないというところがありますし、文学部は細かに「やろうよ」となったら、学生にも働きかけやすいところがあります。

（新大学構想会議）
資料からは、市大に入ってくる高校生に対して、他大学と比べて吸引力があるのかどうかというのをお伺いしたいんですが、偏差値でみると、同志社、立命館、関西学院大学あたりが競合している大学と見なせますね。市大と私学のサービスの何が違うかというと、教員あたりの比率に表れているように、私学と比べて3分の1から4分の1の学生数で、それだけ手厚いサービスができるということがありますね。もうひとつは、私学と比べて、授業料が安いということはあります。雑駁にいえば、授業料が安いということと、学生数が少ないということが、私学との差で、交付金が入っていることの効果ですが、それだけのものを投入した結果で、同志社、立命館を比べて、市大が学生を吸引できているかというと、この資料では、とんとんか、負けている実態ですね。そういう点で、公費投入に見合うだけの者を実現できているかというと、あまり説明できていないのではないかと思います。その点はどうですか。

（新大学構想会議）
どの数字が変わると説明できますか。

（新大学構想会議）
たとえば偏差値が高いとか、次に、学生に対するサービスが教員比率が低いということだけで終わっていますが、それに見合うだけのきめの細かい、ということを具体的に、たとえばゼミをやっているとか、そこでどんな指導をして、どういう卒論をアウトプットしているかということまで説明しないと、学生に対するサービスが厚いと言えないのではないか。そのあたりのことをお伺いしたい。
もうひとつは、教員の余力があるかもしれないということについて、コマ数が少ないということがあるとすれば、その分が研究に対する余力があるかもしれないのですが、研究能力が見合うだけの高さがあるか、というと、ＣＯＥは確かに証明になっていますが、科研費はそれほどではない。私学との比較はないですが、研究に時間を投入で来ているなら、それだけの研究成果が挙げられているかという証明がない。
公費投入したことの証明をするためには、学生を吸引できているか、あるいは、きめの細かいサービスができているか、あるいは研究能力が高いか、を説明しないと、私学と比べた公費投入の効果の説明にならないと考えているので、その3つについて、お伺いしたい。
共通教育に関係していることは大事なことで、専門性志向で研究志向の文学部を目指しているようですが、たとえば、国語能力の低い学生が多くて、そういうところに将来像を描いたほうが、社会に対して説明責任が果たせるのではないかと考えますが、プログレス化について、4点目にお伺いしたい。

（大阪市立大学）
難しい問題が多いですが、確かに、偏差値で比較しますと、同じ並びで、同志社や立命館より少し劣っているような感じですね。うちの大学は私学とはなかなか比較しにくいということで、今まで十分に分析してこなかったんですが、今回改めてこういったデータが出てきまして、こちらとしても勉強させていただくことがあるかと思いました。入試などで比較の対象としているのは、やはり大阪大や神戸大であって、神戸大と大体同じくらいではないかと思っていたのですが、やや差をつけられている。このあたり、倍率だけで見ると、4倍程度で他より高い。だけども、偏差値は下回っているところは問題で、神戸大の次に市大を狙っている層が多いということでしょうが、こちらとしては不本意で、もう少しレベルを上げていきたい。恐らくは、これは大阪全体の問題であるとも思います。ある意味、イメージで神戸などに負けている、若者にとって魅力ある都市となっているかというと、必ずしもそうではない。若者から見て近代的な神戸、あるいは、古い文化を持っている京都、奈良との比較で、必ずしも文学部だけの問題ではないと考えているが、それ

にしても、市大文学部として魅力を訴えかけていかないといけない。後の質問とも関わりますが、研究を重視してきた分、外に出ているものが少なかった。市民協働もかなりやっているが、まだ十分でない、上位の偏差値を持っているところから奪い取れていない、ということだと思います。

2点目ですが、少人数で、大阪大や神戸大と基本的には同じだと思います。構成もよく似ていますし、教育についても同じことをやっていて、それほど差がない。少人数教育では、卒論を仕上げるということが一番大切なので、それについて、たとえば、3年生の終わりくらいから、卒論指導の第1回を始めたり、コースによっても違いますが、かなりしっかりとした卒論を出します。これは、他大学から大学院を受けにくる学生の卒論と比較しても違いがある。これが1年間きめ細やかな卒論指導をして来たことの成果だと思いますが、ただし、それがいいかどうかはまた別で、丁寧にやっているのですが、放任主義にして野性的な論文を出してくる学生と比べてどちらがいいかわからない。市大の学生はよく言われるのは、おとなしくてまじめ。水準は高いけれども、ちょっと野蛮な感じはいない。世界に打ち出していくには、野性的なところも必要だとおもいますが、今のところは、1対1、1対3という形でやっていますから、懇切丁寧な指導も可能であるからやれている。教育促進支援機構などもいろんな場がありますので、それもメリットだと思います。

（新大学構想会議）

研究についてはいいです。最後の共通教育的なところに、全体を見渡して何かするという、そういう問題意識はないでしょうか。とくに、他の大学の卒論などもみられているということで、日本語力の点については相当敏感になっておられるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

（大阪市立大学）

全学共通教育に関しては、全学で対応するというルールができておりますので、その中で考えてまいります。日本語のことですが、卒論を重視しています。その意味で、1年生を対象にした文学部基礎演習を昨年度から始めまして、1年生の前期ですが、論文とは何か、ということを講義して、論証する文章をテーマにして学生に書かせます。1万字くらいのものを書いてきますが、それだけではなくて、その授業に３年生も関わります。同じ時間に文学部実践演習というのがありまして、論文とはどういうものか、ということと、1年生にどう教えればいいのか、という２つのテーマで授業をします。その3年生が1年生に15回のうち9回授業に来て、あるいは授業以外でも1年生にアドバイスをして、論文とは何か、図書館の使い方から、テーマの絞り方、論証の方法などを授業します。3年生には我々教員が、そういうきめ細かな論文力を付けるための授業を去年から始めて、それなりの成果が出ています。

この授業を取ったのは去年は40名でしたが、それを含めて、155名にアンケートをとり

ましたが、文学部に入学してよかったか、100点満点で答えてもらいました。4人に1人が100点を付けました。それくらい、文学部はきめ細やかな授業展開していますし、時や空間を共有することが大学だ、ということを教員が汗を流してやっています。

（新大学構想会議）
　その結果、就職したら報告とかはないんですか。先程の話だと、就職先がわからない人が多いという話でしたが。

（大阪市立大学）
　大学院がなかなか報告いただけないという状況ですが、学部の就職も、今から7年前に、教育促進支援機構ですが、文学部の学生は就職活動をしたがらない、しないほうがカッコいいというようなところがありまして、そういうことではなくて、少し背中を押してあげれば、就職率が上がるということで、文学部の学生を対象にした就職支援プログラムを作りました。そうしたら、いろんな就職ができるようになりました。

（新大学構想会議）
　研究科のほうが少人数ではないですか。

（大阪市立大学）
　研究科は研究者志望が多いわけで、修了してから就職までに3～5年くらいあいてしまう。本人たちも届け出を出すような意識がありませんでしたから、そのままになっているケースが多いと思われます。
　それから、非常勤などはみなやっているわけですが、わざわざ届け出を出すということをしない。

（新大学構想会議）
　先生方は自分の教え子がどうなったかは気にしているでしょうから、届け出の有無にかかわらず、大体のことはつかんでおられるのではないのでしょうか。

（大阪市立大学）
　そういう仕組みができていなかった。

（新大学構想会議）
　それは、割と、どこの大学でもそういう感じですよ。

（新大学構想会議）
面倒くさいからやらないだけで。

（新大学構想会議）
府大の人間社会学部がなくなったんですが、あちらにも人間科学科と、言語文化学科を足すと、学生が100人くらいいたし、先生もそれなりにいたと思います。仮に、単純に足したとしたら、大阪大、神戸大をはるかに上回る、強力な文学部ができるのではないかと思うのですが、そういうアイデアに対する個人的な意見でいいんですがお聞きしたい。
もうひとつは、そういう考えでなくて、府大は再編しちゃったわけで、論理的には逆のパターンもあって、こちらもバラバラにして、向こうに入りきらない領域を別にするとか、そういう機械的なやり方もあるわけですが、これも極めて非公式なご意見をお伺いしたい。

（新大学構想会議）
それと関係しますが、もともと教養部はなかったんですね。すると、教養に関する教員の定員はあると思います。学生定員に比べて相当教員が多い状態になっていると思います。文学部と理学部で。教養用のポストとしてありますが、誰が教養でということをしないと、みんな専門だと思って、教養のコマ数だけは義務があって、これを代りばんこで分担していると、全然力が入らない。それが結果的に、日本の教養教育を脆弱にしている。その問題に対して、文学部と理学部はどう答えるか、という問題がある。おそらく、共通教育を充実しましょうということになったら、文学部と理学部から人数をとってくることになります。設置審の最低基準と、現行の差のふくらみ部分が出てきますので、全学でやっていますという綺麗事では済まないので、そこのところの覚悟はどうでしょうか。
府大もおそらくそうなっている、だから、文学系は多い。

（大阪市立大学）
私も国立大学にいて、元教養部があって、改革で無くなって、どうなるかということを見てきましたので、きちんとした教養教育ができなくなっている、みんなが責任を持たなくなる、というのはわかります。私の大学の場合も、ちょっとバランスが悪いところがありましたが、文学部でいいますと、元々旧教養ポストはありました。ありましたが、文学部内の理解では、無くなったという解釈になっている。ということは、全教員が等しく専門を教えられるという認識で今に至っていると思います。全学的にはあるだろうということはわかりますけれども、そのあたりは、たぶん、あいまいにされてきたと思います。

（新大学構想会議）
全学共通教育に毎年提供する枠がありますね。その分だけは残っていますよね。固有名詞ではなく。だから、文学部の教員が多い。

（大阪市立大学）
　きちんと話しているわけではありませんが、文学部の教員の中には、教育を頑張りたいという方が結構おられる。語学系統と文学の方はものすごく力を入れておられる。それは、制度的にどうかということよりも、文学部の教員それぞれの立ち位置が分かっておられる方が多いので、それで全学の共通教育が支えられているところがありますので、今のところは問題はないと思います。それで、文学部の先生方はむしろ共通教育をもっとやりたいという方が多いので、全学的に見ても好転しているのではないか、と思います・

（新大学構想会議）
　安定して、特定の科目を特定の先生が数年間するというところまで行っていますか。

（大阪市立大学）
　だいたい継続してやっています。たとえば、大阪学であるとか、数人で手分けして分野も違うものもありますが。
　それから、先程の質問で、府大との関係ですが、府大の人間社会学部へ聞き取り調査に行きました。いろんな事情も聞かせていただきましたが、そのあと持ち帰ってきていろいろ検討もしたんですが、ひとつは、市大の中で文系学部が強いと言われて、教員数や学生数の規模でもかなりのウエイトを占めていて、そのあたり、府大と比べた場合、市大が文系のほうが強いと我々は思っていますが、さらに今年の3月末で募集停止になりましたが、人間社会学部といっしょになれば、かなりのことはできるだろうということは、話をしております。公式に全体の決議でまとめたわけではありませんし、やり方を考えませんと、単に合体したから大阪大や神戸大を抜けるとか、そういうことではないと思います。ただ、それだけの規模になると、いろいろな工夫ができるのではないか、と思います。
　実際、我々がいろんな教育研究プロジェクトをやっていましても、非常に困るのは、削減された結果、ある程度のマンパワーがないとやれませんから、努力の限界があります。ですから、府大と一緒にやることについては、ある程度前向きに考えられるのではないかと個人的には思います。
　もうひとつは、府大方式ですが、現代システム科学域、文理融合の学域になっていますが、これは何とも言いようがありません。私どもも文理融合は課題として掲げました。ひとつには、新しい学問ジャンルが拓ける可能性がある、期待からですが、文理融合のジャンルを作って成功したかどうか、検証されていない段階だと思います。たとえば、環境とか扱った場合に、学部でどういうカリキュラムを選択して、環境の学位をとって、どういう企業に就職できるのかという道筋が体系的に、具体的に考えられていない。試行的には文理融合型をやるのは賛成ですが、全部にすると、危険な賭けをすることになる。失敗すると全部終わっちゃいますから。文学部で話している範囲では、今までの基礎学問はつま

らないかもしれませんが、その分長く続いてきた蓄積がありますので、それを母体にしつつ、いろんなジャンルで実験的な取り組みをしていきたい。そのために府大と一緒に取り組めれば、それはそれでいいのではないでしょうか。

（新大学構想会議）
市大と府大の違いは、文理融合であるということと、もうひとつは研究組織と教育組織が分離している。プログラム方式です。ファカルティーとデパートメントは専門でやっておいて、こちらはプログラムでやる。これは日本でも最近流行っています。1対1の組み合わせではない。この問題をどうするか。
もうひとつは、市大は大学院重点化でいったん厳しい審査を受けている。府大は重点化していない。それをくっつけたときに、大学院重点化と名乗れるか、ということが最大の課題だと思います。ただ、無理して合わせても仕方ないですから。先生方の意向についてもポイントですし。

（新大学構想会議）
あと、関連質問ですが、サラダボウルなんかは面白い資料ですが、たまたまここに市大新聞が書いてあって、昔商科大学でスタートして、戦後、法文学部ができて、その初代学長の恒藤恭さんが、「産業都市大阪には文学部が必要」と言ったとありますが、この人の理念は、どういうイメージなんでしょうか。あまり議論されていない？
文学部が大事だから独立させた、という一般的なことなんでしょうか。国立大学並みの文学部を作ろうということでしょうか。あるいは、独特の意味があったのか。「国立大学のコッピー」に見えるんですよね、ある意味。だから悪いわけではありませんが。

（大阪市立大学）
市大は総合的な大学として、旧帝国大学を常に意識しています。改革についても、そういう意識はありますし、この時代もおそらく意識されていたと思いますので、大阪を代表するような大学を作る、その時には文学部がない総合大学は考えられなかったのでしょう。もうひとつは、大阪は商業の都ですが、商業だけだと、全国的にはイメージはいっぱいありますが、悪いイメージが多い。ガサツな感じ、がめつい感じとか、そういうときに、都市の品格を考えたときには、文化というものも考えないといけない、と考えたのではないかと推測します。

（大阪市立大学）
データを持ち合わせていませんが、公務員をイメージしていたのではないかと思います。

（新大学構想会議）
国立大の学部は変わった学部は一つもないですね。法、文、経済、理、工、医。立命館などは変わった学部ばかりで、あれはまたマーケット戦略で学生を集める戦略だと思いますが。3年くらいは人を集められるだろうと思いますが。国立は伝統的な学部構成で、明治以来崩さない。公立大学は迷っているんです。都立大は統合でガラガラポンしましたが、市大は伝統的な国立方式で変わった学部はない。府立大は学域に変わった。国立も金沢などがガラガラポンした。これで10年、どう総括するか。結構難しい。学生が筑波を敬遠したのは、何をするのかわからないから。自分の将来がわからないから、20年くらい筑波を敬遠している。最近は立命館などが崩して、崩すたびに人が集まる。ビジネスモデルを作っている。我々はどういう選択をするのか、深刻な問題です。

（大阪市立大学）
府大の入試でも、理系はいいんですが、文理融合のところは確か下がっていました。やっぱり、実験しようと思ったら、危険は伴いますので。

（新大学構想会議）
時間がかかってからしか証明できませんね。

（大阪市立大学）
アジア都市文化学を作ったのも実験でした。これも成功したというのと失敗したというのと両方意見があります。今でも評価が割れている。

（新大学構想会議）
学科レベルであれば、まだいいんじゃないですか。表現文化というのは、人気抜群じゃないかと思いますが。あまりに伝統的で哲、史、文だと。こういう形で新しいものを作るというより、全学的にガラガラポンするということはかなり議論の呼ぶところです。

（大阪市立大学）
その時に、市民の目とか、受験生の目とか、そういう視点で見ないといけないと思います。私の見解ですが、新しい名前、文字数が増えるとか、カタカナの名前とか、受験生にはわかりづらい。私はよく高校に行きますが、進路指導の先生の話を聞いてみると、新しい名称の学部は何をするところかわからないし、将来どうなるかわからないというのが高校の見方です。それに対して「文学部」であれば大体わかる。文学部という名前に面白さに欠けることがあれば、中身で勝負していく。この10年間、だいぶ中身を変えました。

（新大学構想会議）
　我々まったく結論は持っていませんので。名前を変えることで新しさを出すこともありです。

（大阪市立大学）
　ただ、文学部は、古い看板持っているので、それが劣等感になって、中身を変えていかないといけないという危機感で、この10年間改革をしてきました。逆に、看板を替えて、中身変わらなくて、学生が集まらなかったら、何をやっているんだとなりますよね。そんなことでは、市民に対して申し訳ない。

（大阪市立大学）
　今回、改めて他大学との分野比較をしまして、改めてしかるべき大学は文学部を持っているな、ということに気付きました。立命館も文学部がなくなったわけではない。個人的には、伝統的なものはきちんと残しながら、それでも新しいものを実験的にやっていって、学生の感性、これは大事にしないといけない。

（新大学構想会議）
　立命館モデルですが、私学は新しいものを作って、学生を増やせますが、国公立は定員を増やせない。増やせないところで新しいことをしようとなったら、どこかを削るか、ガラガラポンするしかない。そこが私学と国公立の違いで難しいところで、財政制約もあって、低価格で高品質というのが国公立ですから。それで伝統を守り、なおかつ新しい分野に出ていくというのは、二律背反的というか。

（大阪市立大学）
　表現文化と言語情報は、確かに学生の人気は高いですが、大学院への接続が意外に伸びない。やっぱり、基礎的な学会組織に裏付けられた学問分野でないと、研究者としての道につなげていくのは、なかなかむづかしい面もある。

（新大学構想会議）
　表現文化とかは、元々研究者志向の人が少ないんではないですか。それか、学問体系として出来上がってくれば。

（大阪市立大学）
　新しい学問を創設していくのであれば、多少は新しい冒険をするコースを一部設置してもよいけれども、全体をガラガラポンしてしまうと、体系性が失われ伝統的な分野がこわれてしまうと思う。

（新大学構想会議）
　完全に固まってずーっと行くのが伝統かというと、やっぱり時代に合わせて変えていくべきで、かといって時代に合わせて都立大のようにガラガラポンしていくのもどうかということですが。

（大阪市立大学）
　伝統的な学問も、その内部で進化していますよ。学問的課題も変わっていきますし。

（新大学構想会議）
　だから、都市というのは、元々学問としてはなかった。フィールドとしてはあります。切り口が違っただけで、それで都市を学科にするかという話もあります。都市工学というのは、工学付くからまだいいですが。不易流行の話で、どうするのがいいかという話ですが。

（新大学構想会議）
　「公立大学らしさ」の話につながるかどうかわかりませんが、博物館や美術館、府立・市立のもの全体は、また別の話になるかもしれませんが、発掘分野であるとか、一部の、例えば「住まいのミュージアム」などは、学芸員の資格取得であるとか、大学院でミュージアムマネジメントを学ぶとか、そういったものとからめて、市大でやってみてはどうかと、個人的には思うのですが、そういったことについてはどうでしょうか。

（大阪市立大学）
　博物館協会との連携については、日本史の教員を中心に、ワーキンググループを作っているようですが、かなり乗り気なのではないでしょうか。

（新大学構想会議）
　考古学の分野はありますか。

（大阪市立大学）
　あります。ありますが教員は1名です。もう少し拡大したい所ですが、限界もありまして。美術史の教員も、以前はおりましたが、現在はおりません。

（大阪市立大学）
　哲学の分野で、美学の教員はいます。

（新大学構想会議）
国立大学はよく、大学が所蔵する文化遺産で博物館を持っていますよね。そういったコンテンツは市大にありますか。探せばありますかね。ノーベル賞系とか。

（大阪市立大学）
文学部の研究で使用しているものを集めてくればいいのかもしれませんが、そこまでできるかどうか。

（大阪市立大学）
文学部棟の２階に展示スペースがあったと思います。

（新大学構想会議）
国立大学は自分たちのお宝を博物館に出すんですが、ミュージアムと繋がらない。文学部にミュージアムをくっつけると、独自性が出てくるのではないでしょうか。ただ、資金と人が必要であると思いますが、役所そのものが持っているには、やや中途半端なんです。なので、独立行政法人化が一つの流れですが、それ以外では、大学が持つ、という選択肢もあるのではないか。

（大阪市立大学）
昔ですが、市の持っている施設を美術館にしようという案がありまして、文学研究科の教員も関わっていましたが。単独では資金が課題ですが、共同であれば可能かと思います。

（新大学構想会議）
研究分野や美術分野と大学は統合すればいい。博士号を持った人もたくさんいる。北九州市立大学でも研究所を引き取った。研究所の人は、教授になれるメリットがあるし、市は管理分野を大学が担うから合理化になる。大学は教員が増える。授業を持たせられる。どうせ独立行政法人化するなら、研究関連の付属施設を大学に統合したらいいのではないか。

（新大学構想会議）
そう思いますね。

（新大学構想会議）
大阪に住んでいる人は、意外と歴史を知らない人が多すぎる。「東洋のマンチェスター」から止まっている。もっと昔は良い時代で、奈良に大学があまりないので、なぜ大阪でしないのだろうと思う。橿原は研究所しかないし、難波宮から天皇陵まで、なぜ観光地

化もされていないのだろうと。

（新大学構想会議）
国立の研究機関もありますが、あとは神社と宮内庁が所有していることも関係していると思います。

（新大学構想会議）
日本人のルーツなど、これから興味を持つ人が増える分野ではないかと思いますが、そういったところは、大学の立ち位置として非常に面白い分野ではないかと思います。「都市文化」というのは、何となくわかりにくい。

（新大学構想会議）
都市というより歴史文化でしょうね。「都市」というと、社会福祉とか産業政策に向いてしまいがち。それをやっている限り、いつまでも東京に追いつけない。

（新大学構想会議）
文学部の先生が、美術とか博物館というところに手を広げる構想を作って、持ち込んできたら、市長と交渉すると。

（大阪市立大学）
ある意味、ＣＯＥの遺産で食ってるようなところがありまして、そろそろ、転換期に入っていまして、いろんな道を模索しないといけない時期に入っています。

（新大学構想会議）
都市文化学というのは、何の貢献をされるのか、というのがわからない。どういう社会貢献なのか。

（新大学構想会議）
今まさにシーズを集めて上り坂でこれからどうしようかというところではありますが。

（大阪市立大学）
中期計画で文学部から提案しているもので、大阪の文化資源開発ということがあります。それと、府大が考えている観光大学院に、最近になって、一緒にやれるような体制を検討していますので、観光というのは、一つの売りになるだろうということで、ぜひ実現させたい。

（新大学構想会議）
　何かキーワードないでしょうか。創造都市と社会包摂は、ひとつのこの10年の切り口としてなかなかよかったんですが、先20年のことを考えるといまひとつ。今の話だと、平たく言うと歴史文化なんですが、そのままだと先祖がえりでまったくキャッチーじゃない。博物館とか、観光とか、行政とか税金の流れとか文部科学省とかを見たときに、文学部プラスアルファーでちょっと色を付けていくときのキーワードはないでしょうか。

（新大学構想会議）
　市立と府立の施設を包含する概念で、そのワードで一つになれるようなキーワードを作ってもらえるといいですね。

（新大学構想会議）
　そうですね。大阪の歴史文化の掘り起こしみたいな話とか、都市魅力などもつながると思いますが、都市と言わないほうがいいかもしれません。

（大阪市立大学）
　計画を立てるごとに、何で売ろうか悩むところです。戻ってくるのは都市文化なんですが、教育組織と一体となっているのが特徴なので、教育組織は非常に多様にございますので、いろんなものが考えられるけれども、一つに絞りにくい。

（新大学構想会議）
　最初の議論にありましたが、これだけのメンバーで「都市」というワードでベクトル合わせるのは無理がある、あれはあれで合わせられる人が合わせればいいんで、別のキーワードを作って、それに合わせていくことも考えていけば。

（新大学構想会議）
　大阪府と一緒にやるとなると、大阪市だけでなく堺市も考えないといけない。堺は堺で歴史がありますから。

（新大学構想会議）
　先生方の知恵がお金になるんだということで、お金に知恵を合わせてはだめで。

（新大学構想会議）
　民俗博物館と年１回、会合を持ちますが、向こうも新しい先端的なことをされていますから、我々日本人のルーツとか言語とか遺伝子とか、そういうものと、歴史を知りたいというものとが合わない。そういうようなこともされれば。

（大阪市立大学）
　大阪の魅力は、商業だけだと限られます。もう少し大阪市の外で、堺市とか八尾であるとか、いろんなものを含めてくると、昔の文化が見えてくる。近世の城下町とか、大阪で無くなったものが周辺にありますから、そういったものをトータルで考えたほうがいいんじゃないかと思います。

（新大学構想会議）
　民族博物館の遺産というのは、今の日本国政府のもとで、正しく持続可能なんでしょうか。ああいうものを、こちらで引き受けてしまうというような発想はないでしょうか。

（大阪市立大学）
　積極的に考えるほうですから、取り込めるものは取り込みたい。だから、民俗博物館をくれるというのであれば、それは頑張ります。

（新大学構想会議）
　あれも文部科学省の機関ですよね。

（新大学構想会議）
　あまり開かれていない大学院ですね。名前は博物館でわかりにくい。

（大阪市立大学）
　最近は、以前より宣伝に力を入れているようですが。

（新大学構想会議）
　ありがとうございました。

以上